

# 洛北における盆の風流灯籠踊り

福原敏男

Bon Lantern Dance in Northern Kyoto

- ① はじめに
- ② 盆踊り研究の現在
- ③ 灯籠踊りの画像資料「十二月風俗図」
- ④ 洛北の灯籠踊り
- ⑤ 近世文献に記された長谷・岩倉・花園の灯籠踊り
- ⑥ 描かれた洛北の灯籠踊り
- ⑦ おわりに

## 【論文要旨】

国立歴史民俗博物館に所蔵されている紙本捲り一枚の「長谷踊夜宮図」は新出の洛北灯籠踊りの絵画資料である。京都市左京区の岩倉盆地の東に鎮座する長谷（ながたに）八幡宮で演じられている盆の灯籠踊りを描いたものと思われる。現在、伝承は絶えていたが、この灯籠踊りには、長谷の集落の人々のみでなく、岩倉と花園の村人も参加した。灯籠上の造り物として、水車、御座船、牡丹、鳥居と神社、梅、桶に柳、花瓶などが判別できる。人間が被ることが果たして可能かと思われるほど、台座の灯籠部分が肥大している。現在の京の盆の芸能としては、西南部には芸能的六斎が席巻し、東北部には念仏踊りや題目踊りが伝えられている。京の町中で十六世紀まで流行した風流踊りの流れは、六斎（中堂寺・壬生）の棒振りや今宮のやすらい花のうちに命脈を保っている。また、灯籠踊りの面影をとどめるところは、わずかに京都の北、若狭街道沿い（高野川沿い）の近郷農村の村々である。すなわち、現在では左京区の

久多の花笠踊りと、同区八瀬の赦免地踊りを数えるのみである。近世の文献や画像資料から考えると、長谷八幡宮においても、室町時代の趣が横溢している盆の風流灯籠踊りが行われていたのである。

## ①はじめに

盆行事は正月行事と並んで最もさかんに行われている年中行事であり、全国的に多様な民俗行事が展開している。かつては旧暦七月十五日、現在では八月十五日を中心に、先祖や無縁の霊を供養する行事で、十三日夕方頃に先祖の霊を墓などから迎え、十五日か十六日に送り帰すという伝承が多い。祖霊はさほど遠くないと観念された他界から子孫の生活を見守りに来るのだといわれ、子孫も迎え方、もてなし方に気を配る。祖霊に長居されないように数日の期限を設けて、歓待と送りの儀礼がある。また、盂蘭盆には火の行事が多い。火を用いて祖霊や精霊、神霊を送迎する信仰や、それに関わる清めや供養といった、火の根源的機能によるものである<sup>(1)</sup>。各家で吊るす高灯籠は祖霊が降りてくる目印とされ、例えば、京都五山の送り火（通称大文字焼き）は集団で祖霊を送る行事である。藤原定家はその日記「明月記」寛喜二年（一二三〇）七月十四日条に「近年民家、今夜長き竿を立て、其の鋒に燈楼（燈籠）の如き物を付け紙を張る燈を挙ぐ。遠近之れ有り。遂年其の数多し。流星人魂に似たり。」と記している。木の杵に紙を張った釣灯籠を、竿先に高く掲げる高灯籠を立てて、祖霊を迎える習俗が、当時民間に広まりつつあった様子がわかる。遠近の灯籠が人魂に似ていると連想している様に、まさに灯りに先祖の霊が依り憑く、降りてくる目印としての信仰が広まりつつあった。

各家で家族・親類が行う盆行事とともに、村や町という共同体による集団行事として盆踊りが行われる。本来、旧暦七月十五日の満月の夜に祖霊の歓待と鎮送のために踊られる慰霊の芸能である。頭巾や笠で顔を隠して踊る土地では、帰ってきた亡者をあらわしたものと伝えている。現在では輪踊り（円陣）形式が大多数であるが、阿波踊りのように列を

作って楽器を鳴らして踊り歩く、練物・道行形式もある。村内の新仏の家々を次々に訪れては、その庭で輪になって踊る、念仏踊り形式の盆踊りが先ずあり、輪踊りはこの後半の部分だけが独立し、拡大したものであり、輪の中心に櫓や傘を立てるところに、神降臨の依代という古い信仰の面影を残すと考えられている<sup>(3)</sup>。現代の盆踊りは地域住民がこぞって楽しむ、夏の夜の納涼と楽しみの芸能である。まさに開放的な娯楽芸能、地域社会のイベントともなり、はやりの歌謡曲やその地域の民謡なども歌われる。

また、全国津々浦々に展開している多様な盆踊りの一つとして灯籠踊りがある。かつては蠟燭、現代は電灯による灯火を入れた風流灯籠を頭上にのせ、あるいは手に持って踊る盆踊りである。照明具である灯籠は軽量と照度を保つために、細い杵組と紙張りの構造が基本形態であり、踊りとともに灯火が揺らめき、それが生み出す光と影によって幻想的な雰囲気醸し出す。現代では想像すべくもない漆黒の暗闇のなかで、あるいは満月の月明かりの下で、花火登場以前の真夏の夜のイルージョン、光と色の風流として人気を博した。灯籠を頭にのせるといふ意外性、その造り物の当座性、造花などの装飾や意匠の趣向をもって人々を魅了した。熊本県山鹿市の女性が被く金灯籠のように、上部の造り物自体が灯籠として光り輝くという事例は、電球や電池という技術の普及以降のものであろう<sup>(4)</sup>。それ以前は、灯籠は造り物の下台（台座）の部分であり、上からは満月の月明かりが、下からは台灯籠が、主役の造り物を照らすという風情であった。灯籠踊りに使われる灯籠は角形が多く、美しい模様や切り紙を張りつけたもので、下には幕を張って、踊り手の顔が隠れるようになっていたものも多い。編み笠や手拭で顔を隠して踊っている点について、私は「個の抑制」と考えているが、人間以外の異類異形のも物が踊っていることを象徴したものという説もある<sup>(5)</sup>。

さて、本稿の目的は京都市左京区岩倉長谷町の長谷八幡宮において、

かつて長谷・岩倉・花園三村によって踊られた盆の灯籠踊りについて考察することにある。この踊りを描いた絵画を紹介し、華やかな室町心が横溢していた風流芸能であったことを検討したい。そこで、先ず、従来の盆踊りの先行研究について整理しておこう。

## ② 盆踊り研究の現在

盆踊りの成立に関しては、かつて歌垣における発生説があったが、現在では否定されている<sup>(6)</sup>。盆踊りの研究は、昭和三年（一九二八）七月の民俗芸術の会編『民俗芸術』第一巻七号に「諸国盆踊号」、翌八月の八号に「統諸国盆踊号」があげられ、急速に活発になっていった。現在の研究段階として、念仏聖の始めた躍り念仏に発生を求めるのが定説である。例えば、本田安次は念仏による仏の供養に加えて、風流という観念を重ね合わせて理解する必要性を説いた<sup>(7)</sup>。また、大森恵子のように御霊信仰を根底にした念仏芸能としての盆踊りの側面を強調する説もある<sup>(8)</sup>。

さらに、山路興造は、念仏聖が宗教的法悦の境地を求めて自ら躍った躍り念仏と、死者供養のために念仏を唱えて踊る盆踊りとは、その精神においてまったく別のものであるとし、躍り念仏から盆踊りへの移行に、もう一段階を想定している<sup>(9)</sup>。季節に限定されることがない一遍などの躍り念仏と、年中行事となった盆の念仏踊りの間には、宗教から芸能へという懸隔があるように思われる。以上の諸説に対し、橋本章は盆踊りの本質を遊興とみている<sup>(10)</sup>。すなわち、橋本章は「盆踊」として成立した芸能そのものは、人々が祖霊の供養にかこつけて遊興を求めたものであり、その時点においては既に、諸人の盆踊に対する関心は娯楽性の追及に完全に移っていたのではあるまいか」と論じている。盆踊りが成立した室町中期の京の都とその近郊の人々にとって、すでに遊興と受けとめられていた、という説である。これは受容者の心性の問題と関わっており、

整然と割り切って解釈できない難しさがある。

室町中期以降の盆踊りの展開過程を的確に論述したのが和田修である<sup>(11)</sup>。盆踊を定義づけることは難しいが、広義にとらえれば孟蘭盆の時期に行われる風流踊をさすことになると思われる。もともと風流の踊りは盆に限ったものではなく、祇園会に代表される御霊会の中で発達してきたが、室町中期から拍物<sup>はやくもの</sup>が念仏と結びついて盆に行なわれるようになった。その芸態は、単純な拍物<sup>はやくもの</sup>から、大型の太鼓を胸につけて打ちながら踊る太鼓踊、叙情的な小歌を組歌形式にして用いる小歌踊などと展開してゆき、室町後期には京都で將軍家や守護大名などが張行する大規模な風流の踊り掛けが流行し、周辺の郷村に伝播していった。近世に入ると、都市では老若男女が集まって手踊形式で多くの曲を踊ることが盛んになり、町踊と呼ばれた。歌舞伎や遊里などの文化と交流しながら、次々と新しい形態が生み出され、その時々流行が各地に伝えられた。「盆踊」という言葉そのものは、集団手踊の町踊について用いられるようになった呼称かと思われるが、特定の様式を指すばかりでなく、盆に行われる風流全般をそう言い習わしてきたところがある。

関東周辺から北では、風流踊の伝播が遅かったため、櫓を中心に大勢の男女が手踊をする、町踊形式の「盆踊」が主流をなすが、それより西の地域では、必ずしも「盆踊」とは呼ばれない、さまざまな形態の盆の風流踊が今なお混在して行われている。（中略）また、風流踊はもともと御霊信仰に由来し、地区内の各所で踊って、疫神を遷却することに意義があるから、京都のヤスライ花を典型として、移動しながら神社・寺・辻などで踊ることが多く行われている。

現代人がイメージする盆踊りの典型は、和田がいうところの集団手踊の町踊りであろうが、この成立と展開には、近世中期以降流行した「盆踊り口説き」と総称される盆踊り歌の影響が大きい。この定着以降、芸

態や踊り歌が固定化してしまい（画一化ではない）、近世前期までの風流精神に溢れた盆の風流踊りとは明確に一線が画されることになる。

さて、先学の所説を整理すると、孟蘭盆における死者や精霊の供養としての踊りは室町初期から姿を現し、風流拍物（はなぶしもの拍子物・囃子物とする史料もあるが、本稿では拍物の表記を用いる）、念仏拍物、念仏風流などと呼ばれた。<sup>(12)</sup>これは風流造り物を太鼓・笛・鉦・鼓・鞆鼓などの楽器で囃すもので、独特の短章の歌がリズムカルな囃子にのって歌われる。風流拍物は孟蘭盆のみではなく、正月の松囃子にも、御霊会のような初夏の祭礼にも行なわれた流行踊りであったが、やがて盆の風流踊りとして席卷するようになる。十五世紀前半の京都伏見郷の郷民による風流拍物を活写した日記として、伏見宮貞成親王の『看聞日記』はあまりにも有名である。この芸能は趣向を凝らした風流の造り物を曳き廻り、それを囃しながら伏見宮邸や互いの村々を掛け合うものであった。そして、この囃子に念仏を用いることもあった。『看聞日記』永享三年（一四三一）七月の条を初見として、盆に即成院という寺院で行われる異形風流の「念仏躍」の記事が現れる。初めて、盆の芸能に「念仏躍」の語が使用され、翌年には「念仏拍子物」と言い替えられている。京郊伏見郷においては、この時期が風流の拍物と念仏踊り系の踊りが、融合してゆく過渡期であった。

やがて、念仏踊りと拍物とが、小歌なども取り込みつつ融合して風流踊りとなってゆく。これは、花傘（笠）、仮装も含む拍物が輪踊りの中心に入り（中踊り）、その周りを揃いの衣装などで着飾った踊り手が取り巻いて踊る（側踊り）輪踊りである。風流踊りとは、このような形式の成立以降の名称であり、当時流行の小歌を、テーマに合わせて数首組み合わせ、独特の踊り歌にした風流踊り歌が歌われ、即興歌もあった。拍物や風流踊りは、踊り手が居住する村や町で踊られるだけでなく、他所へも出向いて踊られた。踊りを掛けられればその相手に掛け返す、

互いに掛け合う「掛け踊り」が拍物の基本形態であり、それは集団的な精霊供養にもとづくものと考えられている。例えば、『兼見卿記』天正九年（一五八二）七月二十七日条に、洛北岩倉よりの風流の返し（踊り）が、今夜高野より（岩倉へ）罷り向う、とある。おそらく、孟蘭盆に岩倉から高野に盆の風流踊りを仕掛け、この日に高野から岩倉へその返しがあったのであろう。風流踊りは応仁・文明の乱が鎮まった後の京都において爆発的に流行した。十六世紀、特に天文年間（一五三二―一五五）が最盛期であり、七月十五日の孟蘭盆行事が済んだ後、町衆や公家の若者たちがグループを成して、互いに掛け合い、街辻で演じられている様子が『洛中洛外図』上杉本や国立歴史民俗博物館甲本に描かれている。見物の主たる興味は風流の趣向、造り物にあったようで、踊り手の衣装や被り物、採り物にも、華麗で美しい趣向を凝らして踊り歩いた。

灯籠踊りについて叙述する場合、以上のような拍物と風流踊りの展開とともに、公家を中心とする孟蘭盆の贈答品である盆灯籠との関連を考えなければならぬ。<sup>(13)</sup>室町時代には、盆の十三日に臣下などが風流灯籠を主家筋に贈る盆灯籠の風習がみられ、贈り先は禁裏や将軍家に集中した。十四と十五日の両日に飾られ、十六日に撤収したが、撤収後の灯籠は贈り主などに分配された。当時、風流灯籠を奈良灯籠とも称したのは、奈良で製作されることが多く、それらは花台の如しと言われたほど華麗であった。<sup>(14)</sup>その灯籠をさらに他所に贈ったり、神仏に奉獻する供養灯籠ともいべき風習もみられた。これは近世にも引き継がれ、『日次記事』によると、禁裏や東西本願寺において、贈られた風流灯籠を展観する行事があり、十四と十五日には庶民の観覧を許し、多くの見物人で賑わった。このほかに、一般の町屋でも灯籠を掛ける風が生じ、十四日と十五日に、多くの町衆が漫ろ歩いて市街の盆灯籠を見物するようになった。審美眼を持つ不特定多数の見物人の出現によって、灯籠自体にも変化がもたらされた。すなわち、華麗な切子灯籠や風流灯籠が軒先を飾るよう

になったのである。

また、拍物や風流踊りと灯籠との関係でいうと、風流造り物として灯籠を造って、それを念仏や踊り歌で囃した事例もあった。『看聞日記』応永三〇年（一四二三）七月十五日条によると、伏見の郷村である山村は朗詠の心を表わす紅葉に吊るした灯籠、船津は灯籠仕立ての鐘の造り物を出し、これらが「拍念仏」の風流を構成している。『言継卿記』永祿一〇年（一五六七）七月二十四日条に記された粟田口の風流踊りの記事によると、一乗寺の念仏踊りに女房百人、男四、五〇人が参加し、二間四方の大灯籠が二〇基程持ち出され、据え置かれた。これは踊りとともに次ぎの場所へ運ばれる灯籠山ともいべき造り物である。

贈答習俗である風流灯籠、神仏への奉献としての供養灯籠、拍物における風流造り物としての灯籠、及び風流踊りが、影響し合い融合して、灯籠踊りの登場となった。殊に盂蘭盆においては、精霊が依り憑くと信仰された灯籠を頭に戴いて踊る趣向が喜ばれた。例えば、『経覚私要抄』文明元年（一四六九）七月十七日条によると、奈良において二十人ばかりが、桶に紙を張った灯炉（灯籠）を被いて踊り、同四年七月十六日条によると、鉦や太鼓五、六人に先導され、灯籠被き十余人が異類の行いをなしたという。奈良では「かつぎ灯籠」（被き灯籠）を念仏踊りに用意する記事は十五世紀に特に多い。京都においても灯籠踊りは流行し、『言継卿記』永祿二年（一五五九）七月二十日条には「風流の御返し之れ有り。（中略）築地杵躍・若衆躍二、西王母・唐船・高砂入破三番、狂言二番等之れ有り。燈呂を頂くもの七八十之れ有り」（読み下し文）と記され、掛け踊りの返礼として灯籠踊りが好まれたらしい。同書によると永祿七年には一二〇人もの灯籠踊りが出ている。

整理すると、盆に灯籠を公家間で贈答したり、寺社に奉納したり、町屋の軒に飾る習俗が先ず成立していた。また、拍物として風流造り物の灯籠を囃すことがあった。それらが同時期に流行してきた、十五〜十六

世紀の南都や京都の風流踊りにおいて、その装飾性、当座性、意外性、一回性という風流の美意識から、灯籠を被いて踊るようになった。

蠟燭が消える一瞬、強い光を放つように、風流踊りは慶長九年（一六〇四）八月十五日の豊国神社臨時祭を最後の一闪の光芒として、京の町ではすっかり影を潜めた。その風流踊りが本稿で課題としている洛北諸村、あるいは西日本各地に受け入れられていったのである。<sup>(15)</sup>

ところで、山路興造は『京都府の民俗芸能』において、民俗芸能として伝承されている京都の盆踊りを次の四系統に分類している。<sup>(16)</sup>

- (Ⅰ) 灯籠踊りなどの風流踊り系の踊り
- (Ⅱ) 念仏や題目を唱えつつ踊る宗教色の濃い念仏踊り
- (Ⅲ) 楽器を用いずに踊り手が短章の詩型で即興的に思いを掛け合う民俗的な踊り
- (Ⅳ) 音頭取りが歌う語り物に合わせて踊る口説き系の盆踊り

このうち、(Ⅰ)と(Ⅱ)系統が比較的古く、(Ⅳ)系統は近世中期に流行したとする。(Ⅲ)系統に関しては、習俗としての古風さは認められるが、その盆踊り歌の大部分は七・七・七・五調の近世調のもので、近世以前に遡及できないとする。そして、(Ⅰ)は十六世紀後半に流行した風流踊りと風流盆灯籠が結びついた結果生まれた、近世の新しい流行芸能であるとする。本稿で課題とする灯籠踊りは、まさしくこの(Ⅰ)に該当する。

### ③ 灯籠踊りの画像資料「十二ヶ月風俗図」

室町時代末、京の禁裏や公家衆の庭に練り込み、あるいは街辻において連綿と行われてきた灯籠風流踊りも、十七世紀以降は廃れてしまった。盛時の京都の町における灯籠踊りの画像資料は、思いのほか知られていない。

本節において、細密画として有名な山口蓬春記念館蔵の「十二ヶ月風俗図」の七月盃蘭盆の風流踊りの画像を、灯籠踊りの資料として考えてみたい。この画帖は縦三十二・七センチ、横二十八センチメートルの折本仕立て六折からなる一帖であり、一月から十二月までの年中行事が十二面にわたって描かれている。国の重文にも指定されているものである。本図に関しては、田中喜作が土佐派による近世初期風俗画として取り上げ<sup>(17)</sup>、榑崎宗重は東京国立博物館蔵「月次風俗図」(八曲屏風)とはなはだ近いものを感じさせるとし、室町時代末期の作と考察した<sup>(18)</sup>。真保亭は前記「月次風俗図」が武家の年中行事を中心としているのに対し、本図は庶民を中心として描いていることを指摘し、菅沼貞三は本図を土佐派系統の女人の筆端によるもので、慶長以前、およそ天正頃の作例と推測した<sup>(20)</sup>。笠理砂は図様とモチーフの点から制作目的や注文主への考察をすすめた<sup>(21)</sup>。

ここで問題にする七月の光景は、ある公卿邸の庭先に練り込み踊る盃蘭盆の風流踊りである。従来の研究は専ら美術史の視点からのものであり、『近世風俗図譜』<sup>(22)</sup>には全十二面全てが原寸大のカラー図版で掲載されたが、その刊行以降の二十年間、この踊りを灯籠踊りとする説は管見の限らない。以下、子細に検討してみる。

画面右端の二人の男と左端の赤熊を被った者は、それぞれ手に棒を握っており、彼らは棒振りと呼ばれる、練りの先導役であろう。楽器は全員で五名、笛吹き二名の内一名が女性、締め太鼓一名、鼓二名を加えた四名は男性であろう。囃子方を中心に、その周囲を時計回りに踊る十一名は皆扇子を振っており、男性は二、三人、多く見ても数人が交じっている。山路は、風流踊りの特色は、本来素人芸であるという伝統をひいている故、踊り手が主に男性の若者である点を強調する。その例として本図を挙げ、「若者が華麗な小袖を借用して踊る姿」<sup>(23)</sup>と比定しているが、どうみても男性は少数であろう。草木が描かれた金扇、華麗な小袖、

黒い前垂れ、長い白布を巻き、両端を左右に垂らした白帷子頬被りに統一された若い男女の踊り手である。小袖の柄が踊り手一人置きに統一されつつ、囃子方も含めて全員が左方を肩脱ぎして、多彩な柄の下衣によって、「統一のなかの個性」を表現するという繊細な趣向を表現している。門の外では、数人が高張提灯を下げて風流踊りを照らしており、夜に公卿邸の庭に練り込んだ、その光景を描いたものである。

注目すべきは、花桶と神社を造り物とした風流笠である。私はこの花桶と神社の風流笠の下台部分を灯籠と考えている。その根拠は本図と同時代と思われる上杉本洛中洛外図との比較によるものである。上杉本にも花桶の造り物をのせた風流笠を被って踊る描写があるが、下台はなく、踊り手の頭部に花桶を直接括りつけている。いくら紙製で軽量の造り物とはいえ、下台がないほうが踊りやすいし、見た目もいい。本図「十二ヶ月風俗図」に描かれた花桶の下台が、神社の造り物の下台と同じ大きさであるのは、中に蟬燭の灯明が灯された木枠であるからと考えられる。それゆえに赤く彩色されているのである。『兼見卿記』天正十四年(一五八六)七月十一日条は、羽柴秀次が踊りを張行して禁裏に参上した返しとして、公家衆が演じた折の記事であり、踊り衣装や被り物などの詳しい記載とともに、灯炉(籠)の役一人が記されている。この記事より、灯籠を被く役が十人以上の大規模の踊りだけでなく、「十二ヶ月風俗図」のような小規模の灯籠踊りも当然あったのである。

以上が、「十二ヶ月風俗図」七月を灯籠踊りと考える所以である。

#### ④ 洛北の灯籠踊り

前掲の京都府教育委員会編纂『京都府の民俗芸能』によると、洛北の盆踊りとして、花背別所の盆踊、広河原の盆踊、一乗寺の鉄扇踊、松ヶ崎の題目踊とさし踊、市原のハモハ踊と鉄扇、大原の八朔踊、鉄仙流白

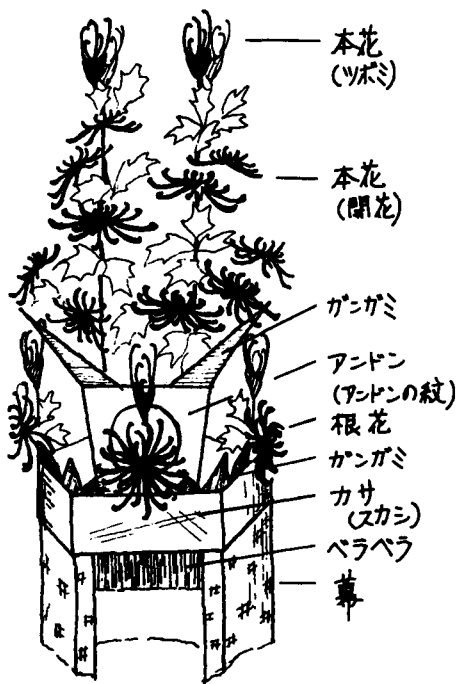


図1 久多花笠の各部の名称  
〔久多の花笠踊調査報告書〕より

川踊、上賀茂紅葉音頭が報告されている。このほとんどは山路分類でいう(Ⅳ)系統の、近世中期以降流行した口説き系の盆踊りである。同書によると、京都西南部には芸能的六斎が席巻し、東北部には念仏踊りや題目踊りが伝えられている。題目踊りが形式的に行われるのに対して、念仏踊りは新しい盆踊りである道念・鉄仙系のさし踊り(紅葉音頭とも)に取って代わられている。京の町中で十六世紀まで流行った風流踊りの流れは、六斎(中堂寺・壬生)の棒振りに残影がみとめられ、今宮のやさしい花のうちに命脈を保ってきた。また、灯籠踊りの面影をとどめるところは、わずかに京都の北、若狭街道沿い(高野川沿い)の近郷農村の村々である。現在では左京区の久多の花笠踊りと、同区八瀬の赦免地踊りを数えるのみである。

左京区久多の花笠踊りは、八月二十四日、中の町の志古淵神社祭りに壮年の村人が花笠を手に持って踊る<sup>(24)</sup>。花笠とは造花で装いを凝らした風流灯籠図1のことで、昭和初期までは少年たちが被いて踊った。花笠は布を垂らした六角の「笠」と呼ぶ台の上に、四角の行灯をのせ、その行

灯の四隅を菊・朝顔・牡丹・菖蒲・ダリア・バラ等を象った造花で飾った繊細なものである。笠の周りには「透かし」という切り紙細工を施す。基本的には笠と紙張灯籠という二つを組み合わせた複合灯籠の形式である。森谷尅久の報告によると、造花の役にあたった一家は総動員されて灯籠造りに駆り出されたが、戦前までは若い男性にとって喜びがこもった仕事であったという。なぜなら、祭りが終了したのち、最も美しく仕上がった造花を、日頃好意を寄せている女性に捧げるからである。花の数が多ければ多いほど村一番の評判娘ということになる<sup>(25)</sup>。

十月十日、左京区八瀬秋元町の八瀬天満宮境内秋元神社に奉納される赦免地踊りは、灯籠踊りとも呼ばれるように、女装の青年が頭上に切子灯籠を戴いた風流踊りである<sup>(26)</sup>。切子灯籠には各所に精巧な透かし彫りが施されている。灯籠を被く八人の「灯籠着」を中心に、音頭取り四人、太鼓打ち一人、太鼓持ち二人、シンポチ四人、踊子十人で構成される。現在では、「灯籠着」は踊りと呼べるような所作をとることはないが、道歌で練り込み、狩場踊りで納める構成は古態をとどめている。

徳江元正は、京の町中から久多への伝播経路を、以下のように推測している<sup>(27)</sup>。

久多の風流燈籠は、室町末の京の風の影響とみてよいかと思う。途中に、八瀬の赦免地踊の燈籠を置いて考えてみればよからう。少し飛んで、湖北伊香郡西浅井村下村下塩津神社の花笠踊でも、久多と似た形の燈籠を用いている。近年は造花を買ってくるが、以前は氏子がハナをつくったものであると聞いた。やはり、氏子自身が日時を費して、祭のたびごとにつくりあげることが、本来のすがたなのであろう。京の禁裏や町中ではやくすたれた手製の花の風流は、かくして、京辺土の神事に痕をとどめたのであった。

徳江の言うように、これらはかつて京の町中で成立し、全盛を誇った風流灯籠の影響を受けて創始された、同系統の灯籠と考えられよう。つ

まり、町中から八瀬へ、途中越・花折峠を経て安曇川に至り、そこから久多川に入るといふ、かつての若狭街道から久多へという伝播コースが考えられている<sup>(28)</sup>。さらに大津市葛川貫井町や同細川町、朽木村地子原でも、八朔祭りや放生会において造花で装飾した花笠の伝承があり、安曇川一帯の花笠分布圏が想定されている<sup>(29)</sup>。

また、京都市左京区修学院の八月二十七日の題目踊りと紅葉音頭は、大日踊りとも総称され、七町会館前に櫓を組んで踊られる。櫓には青竹の竿が立てられ、その先には薬玉や「南無大日如来尊」などと書かれた短冊を付けた切子灯籠が一灯のみ吊り下げられる<sup>(30)</sup>。かつては修学院離宮中の林丘宮という尼門跡がこれを奉納し、今では保存会が管轄している。先述した『京都の歴史』四によると、この切子灯籠は、かつて灯籠踊りであった一乗寺の念仏踊りとの間の脈絡がうかがわれる、としている。これは二節で述べた『言継卿記』永祿十年七月二十四日条の二〇基程の大灯籠のことであろうが、江戸時代の様相は不明である。

さて、今回紹介する新出の「長谷踊夜宮図」の舞台である長谷八幡宮は、京都市左京区の岩倉盆地の東、瓢箪崩山の西南麓に鎮座する。長谷八幡宮で演じられた盆の灯籠踊りには、長谷の集落の人々のみでなく、岩倉と花園村の人々も参加した。長谷と花園村の中間に、中という近世村もあり、その村も長谷八幡宮の氏子であるので、当然灯籠踊りには参加したはずであるが、中村に関する記事は確認できない。同社は『兼致卿記』文明一十七年（一四八五）八月十六日条に「八幡長谷・花園・中村三郷の氏神」と記されるように、中世以来、この三集落の産土神社であった。長谷は平安時代の歌人、藤原公任が山荘を営み、聖護院や解脱寺などの寺院が営まれ、中世、この地は聖護院山荘（長谷殿）など貴紳の山荘地として知られ、歌枕ともなっていた。八幡宮の放生会には猿楽が奉納されており、『後法興院記』文明九年（一四七七）八月十六日条の猿楽三番立合を初めとして、同記録長享二年、延徳三年、明応七年と

十五世紀後半の放生会に神事猿楽が行なわれていた。また、『兼見卿記』天正四年（一五七六）によると、丹波系の日吉大夫が長谷八幡宮放生会の演能を担当しており、この座が楽頭職を有していたことがわかる。

『兼致卿記』によると、同放生会の十五日に、銚五本・競馬三番・獅子舞・御供子・御供・御供餅酒の記述があり、十六日には猿楽が奉納されている。以上のように、長谷八幡宮の放生会には中世も後期以来、猿楽が盛んに奉納され、その芸能伝統の上に、村人による盆踊りとして、灯籠踊りが京都町中から伝えられたのであろう。近世以降も中世以来の能奉納の伝統は継承され、『山城名跡巡行志』によると、八月十五日に神輿一基の神幸があり、競馬や翁舞が奉納されている。井上頼寿による近代の聞き書き<sup>(31)</sup>においても、放生会に際し、長谷は宮本なので祭りの所役はなく、花園は神輿を出し、中は馬を六頭出して三番の馬駆けをしている。祭りの中心は剣鉾巡行であり、長谷と花園から二本、中から一本出し、行列は出亀山の御旅所までを往復する。神輿を先導するのは「御大供持」といって、神饌櫃を頭にのせた宮座の一和尚の妻あるいは娘であった。

旧八月十五・六日の放生会の一ヶ月前、七月十五・六日には盆の灯籠踊りが演じられた。これは山路分類「(1)灯籠踊りなどの風流踊り」<sup>(32)</sup>にあたるものであるが、残念ながら伝承は途絶えている。山路は、天保三年（一八三二）に速見春暁斎の筆によって刊行された『増保日本年中行事大全』の「七月十五日 長谷・岩倉・花園灯籠踊（今明夜）種々の灯籠を点し、小女頭に載て踊る」の記事を引用し、「長谷・岩倉・花園の灯籠踊や幡枝の地藏踊が、この時期まで本当に伝承されていたなら、今日これらの地の何処かで、その話の片鱗でも聞けると思われるのであるが、それが無いのは不思議でならない」と感想を漏らしている<sup>(33)</sup>。同氏は『増保日本年中行事大全』について「記事の内容は刊行時よりはるかに古いようである」<sup>(34)</sup>と註をつけており、長谷・岩倉・花園の灯籠踊りは近世後期にはすでに廃絶していたと推定している。確かに灯籠踊りに関



しては、近代以降の記録を見つけることはできなかったが、盆の掛け踊りは戦後にも行われている。昭和二十一年の夏の夜、当時岩倉村奥長谷に下宿していた葛西善三郎（大正十一年生まれ）は長谷八幡宮前で演じられた盆踊りを、食い入るように見つめていた。<sup>(35)</sup>

都会の欠配や遅配をよそに、豊作の農村は幾年振りかで復員した若者に充たされ、今日は八瀬、今日は木野とめぐってきた踊が、今夜は長谷で開かれた。宮に近づく人影が森蔭を通してうごめき、音頭が手にとるように聞こえてくる。昼間、あまり気の付かない広場に、提灯を灯し、真中に櫓を組み、既に夥しい人の環が二重三重になつて庭を埋めつくしている。白がすりに黒の兵古帯をしめ、手拭を器用に冠り、女性は袴のようなものを着け、赤い襷をしめ上げて踊っている。音頭の声が森をぬい、林を越えて流れる。その一段毎に手を打って「よいとよやまか、どっこいさのせ」と皆が囃し立てる。哀しいような、やるせないような声が薄闇の中をさまよう人達の一人一人に灯をつけて廻り、周囲を取り巻いて立っていた人々も、一人入り、二人入り、次々と踊の環へ吸い込まれてゆく。（中略）生ける者の歓びと死者の哀しみが一つとなつて炎のように燃え上がってゆく。上の途からも下の道からも、三三五五男女の群が吸い寄せられ、流れて来てはこの渦の中へ飛び込んでゆく。

終戦翌年の豊作の喜びの中、八瀬や木野をめぐってきた掛け踊りは数少ない農村の楽しみであった。中村治による注記<sup>(36)</sup>によると、当時、長谷集落の盆踊りは、八幡宮前の広場（境内ではなかったらしい）、石の鳥居、上ノ町の蔭山神社前（同社は現在長谷八幡宮の境内にまつられているが、以前は長谷上ノ町にまつられていた）及び愛宕社前で行なわれていた。「さまよう人達の一人一人に灯をつけて廻り」とは、葛西の文学的表現であり、頭上の灯籠に灯をつけて廻ったのではなからう。櫓を囲んだ手踊りと思われる。花園においても、戦争が始まるまで、紅葉音

頭が盆踊に歌われており、現在は一節のみが伝承されている。<sup>(37)</sup>

## ⑤ 近世文献に記された長谷・岩倉・花園の灯籠踊り

現行の、あるいは廃絶した洛北諸村の灯籠踊りは、紙張の灯籠を下台（台座）とし、その上に飾られた造花、草木や名所の山水などの紙製造り物を頭に戴き、踊歌や念仏を唱えて踊るものである。これらは様式的に言えば風流灯籠そのものであるが、江戸時代の後半には一般的には「大燈籠」と呼ばれる（『備後国福山領風俗問状』<sup>(38)</sup>）灯籠の類に入られている。

現在では、伝承されている久多や八瀬の事例が著名であるが、江戸時代にはこの両村の灯籠踊りよりも、長谷・岩倉・花園の盆の灯籠踊りの方がはるかに有名であり、様々な文献に記されている。以下、地誌類などを読み下し文で表記し、内容を検討しよう。

①坂内直頼『山城四季物語』、延宝二年（一六七四）は、『都歳時記』との書名もあるが、挿絵があるので後述する。

②黒川道祐『日次記事』、延宝五年（一六七六）～貞享二年（一六八五）頃

七月十五日 燈籠躍 洛北岩倉・花園両村の少年女子、各大燈籠を戴き、各八幡社前に聚りて、男子太鼓を撃ち、笛を吹き踊躍を勧む。是を燈籠躍という。又、岩倉観音堂前に踊躍を作る。両処共踊躍の後、村人烟火を点す。烟火は倭俗に火花をいう。頭上に載せる所の燈籠、踊躍する女子の家々、春初より製造しあるも、互いにその作る所の模様を秘す。

十六日 今夜岩倉・長谷、また燈籠躍を作る。火花等の儀も前夜と同じ。

③黒川道祐『北肉魚山行記』、天和二年（一六八二）

七月十四、十五夜（中略）村中の少婦、大なる燈籠を頭上に戴き、白き帷子に赤き裙を垂れ、八幡の前前にて踊躍す。太鼓・鉦鼓等の拍子物あ

り、是れを燈籠踊りと云。洛人争ひ観る。躍は深更に及び終る。其後大なる花火数品あり。予亦先年之を見る。

④黒川道祐『遠碧軒記』延宝三年（一六七五）

七月十五日に花園より長谷の八幡の前へ燈籠をかつぎ踊り来る。それすみてから長谷の踊出す事、それすみてから花火あり。十四日の夜もあれども、これは在所にて十五日の夜の習礼なり。この宮の祭は八月十五日なり。岩倉にも九月の九日と十五日と両度祭あり。

⑤四時堂其諺『滑稽雑談』卷十三、正徳三年（一七一三）跋

北麓の花園にて、毎年今頃（七月十五日）念仏踊を催すなり。おさへ燈籠を頭に頂だき、亦轆をかけて踊る者二、三輩侍る。これ新に嫁したる嫂なり。この燈籠は髻の方より張て遣すなり。在所の銘々思い思いに立て、総踊、念仏に節を附て踊る。故に念仏踊とも申ならし。

⑥川口好和『奇遊談』寛政十一年（一七九九）序

洛北花園村に、毎年七月十六日の夜、里の童女頭に二尺四方もあるべき角なる紙ばりの燈籠を頂き、上に名所の山水などの形を造りて、燈火を照して、念仏を唱えつつ踊る事あり。隣村岩倉村にも同日同じ様な踊りあり。

⑦『諸国風俗問状答』（一九世紀前半）「大和国高取領風俗問状答」、七月

洛北花園村に、毎歳七月十六日の夜、里の男女頭に二尺四方もあるべき角なる紙ばりの燈籠をいただき、上に名所の山水などの形を作りて、燈火を照して念仏を唱つつ踊る。是を華園燈籠踊という。

⑧喜多川守貞『守貞漫稿』卷二四、嘉永六年（一八五三）

洛北花園村は七月一六日の夜、里童等頭に方二尺許の紙張燈籠の上に、草木山水等の紙製の造り物を作り、燈し戴き、念仏を唱え踊る。是を花園燈籠踊と云う。北岩倉村にも同夜同製の踊す。以上京師の踊り昔より例として今世に廃せざる事なり。

⑨大田南畝『一話一言』安永八〇文化三年（一七七九—一八〇六）

京都踊所々にあり。島原踊盆中あり。此の外に松ヶ崎の題目、岩倉燈籠踊、下賀茂はねす踊、浄土寺村念仏踊、白川しよがいな踊、祇園町の踊なり。右毎七月十五十六日の夜なり。

⑩『俳諧五節句』元禄元年（一六八八）自序

花園踊、都北山辺の在名なり。十五日の夜踊なり。在処の嫁、置燈籠の尾のあるに左右に絃無き弓のような物あり、それを両の脇にかけて腕に押さえ燈籠を頭に戴いて踊る。赤前垂するなり。その燈籠を髻張りて遣わす。大方、年に三人ばかりは嫁呼ぶ故踊るなり。惣踊り念仏にフシ有りてその中に交じるなり。

以上を整理すると、以下の問題点に集約できよう。

I 総（惣）踊りとして、六字の名号「南無阿弥陀仏」に節をつける念仏踊りがあった。

II 『日次記事』によると、七月十五日は岩倉と花園の両村が長谷八幡宮において踊り、一六日は地元である長谷と岩倉の両村が同社で踊る。

III 各家々で作る模様（燈籠の趣向）は祭り当日まで秘密にしておく。

IV 村に嫁いできた新妻が燈籠踊りを踊った。

V 『北肉魚山行記』の記述で興味深いのは、洛人が競って見物しに来る様子である。

VI 『滑稽雑談』の轆とは磬の古字であり、鼓の音を意味するが、鞆鼓をつけて踊る意味であろう。

VII 岩倉では観音堂前（『北肉魚山行記』によると、大雲寺の山下に観音堂があった）で燈籠踊りが踊られた。

絵画資料から音声を推測することは困難であるので、上記の文献が参考になるが、長谷八幡宮の燈籠踊りでは六字名号に節をつけ、念仏を唱えつつ踊ったのであった。八瀬の赦免地踊りでは、道歌、潮汲歌、花摘歌、茶摘歌など一〇番の踊り歌を伝え、久多では一三〇番余の踊り歌を



図2 長谷、岩倉、花園の灯籠踊り  
 (『骨董集』より)

残しており、上と下の二組に分かれ、毎年七番の奉納曲を、上・下組が三番と四番に分けて年ごとに交替して行ない、掛けられれば掛けかえすという風流踊りの形態をよく示している。長谷八幡宮の場合も、周辺の民俗伝承より類推すると、念仏踊りのみでなく、小歌踊りをも踊り歌として踊ったと思われるが、文献史料からは判明しない。

## ⑥ 描かれた洛北の灯籠踊り

描かれた洛北灯籠踊りとしては、従来、次の二種類の図が知られていた。一つは図2の延宝二年(一六七四)の『山城四季物語』<sup>(39)</sup>であり、先述したように『都歳時記』とも称され、『骨董集』には後者の名で掲載されている。同書の巻第四、七月の項に「五、十五日十六日の夜松ヶ崎長谷岩蔵花苑踊の事」として、前半部の松ヶ崎を略すると、「長谷・岩蔵・花苑にては、六字の念仏にふしを付、さまざまの花をかざり、匠

をつくしたる四角なる燈籠を戴ておどる、いづれも肝にいらるひとふし、きわめて品ある事、都にも恥ずおもしろし。此所にては氏神の前より踊初、其としみまかりたる亡者有家に行て、夜更までおどりありくなり、かくばかり例年にもよほしたる事なれば、由来なきにしもあらじ、なれどたしかに知者なしとかや。」とある。灯籠踊りは先ず、八幡宮において踊りはじめ、終ると村内の新仏の家々を訪ねて踊る形式であった。その図を見ると、右隅には高灯籠が立ち、鉦打ち大太鼓、鉦、笛各一名の構成である。三人の灯籠踊りの内、左の灯籠は楽人が太鼓を両桴で打っている造り物である。この太鼓は大きさからは雅楽の樂太鼓とも考えられるが、鼓皮面の三つ巴の文様から大太鼓のつもりであろう。『看聞日記』によると、永享七年(一四三五)には北野社頭舞樂の体の風流灯籠があり、この趣向も室町期から人気があった。右上の造り物は、月に兎に薄、下の造り物の草花は不明である。三人の灯籠踊りという構成は、八幡宮における総踊りではなく、幾組かに分かれての、新仏の家の庭における新精霊への奉納踊りであろう。

図3は左京区松ヶ崎堀町の日蓮宗本湧寺の題目踊りを描いた元禄一七年・宝永元年(一七〇四)『花洛細見図』である。松ヶ崎ではもみじ音頭(さし踊)に盆踊りの座を明け渡したが、それ以前には灯籠踊りが行なわれていた。同図によれば、箱状の枠に紙を張った灯籠の四周にシデを垂らし、その上に山水や草花の造り物を飾っている。その灯籠をいただいた六人の踊り子による灯籠踊りであった。その舞場には盆行事らしく、右に竿にさしあげた切子灯籠もみえている。同書には「法花経の題目にふしをつけて、拍子にあはせて、老若男女うちまはり、とうろうをかづきて、おどる事なり」とあり、松ヶ崎ではこうした風流の灯籠をかぶり、六字の番号を歌い踊り、大太鼓・鉦・笛の囃子がついた。同書によると、灯籠は台座の部分約二尺(約六十センチ)×一尺とあり、全体の均衡からすると非常に大きい、これは後述する長谷八幡宮の灯籠



図3 松ヶ崎本湧寺灯籠踊り（『花洛細見図』より）

も同様である。

今回初めての紹介となるカラー図版「長谷踊夜宮図」は国立歴史民俗博物館に収蔵されており、形態は紙本捲り状一枚、部分的に淡彩が施された墨書の粉本である。縦五七・九、横一〇四・六センチで、制作年代

は十八〜十九世紀と思われる、景観年代は十七世紀まで遡る可能性もある。<sup>(40)</sup>同宮は応神天皇や小野宮惟仁親王を祀る。町中よりの踊りの伝播時期を考える際に、長谷八幡宮杜家の伊佐義雄が明治十六年九月に記した「土産大神雑誌」が参考になる。同書には、元和年中（一六一五〜二四）に社殿が大破し、東福門院によって再興された一件がある。東福門院とは後水尾天皇の中宮であるが、二代將軍秀次の娘が婚姻による朝廷懷柔策のため入内し、明正天皇等を生んだ人物である。東福門院は寛永年間に岩倉大雲寺の再興を援助し、それは長谷八幡宮にも及んだらしい。この十七世紀前半が、灯籠踊り伝播の一つの画期であったと推定できよう。本図右上には以下の墨書がある。

長谷踊夜宮<sup>(41)</sup>「七月十五日」灯籠色々「十二」とうろうの上」作物つくし」とうろう

いた、く」人皆十六七女」白帷子ほうかふり」赤まいたれ

（「」は行変を示す）

また、本社屋根の部分には「ヒハタ 八幡宮 社何モ白木」と記され、松皮葺で南向きの流造、白木の三間三面の社殿が正確に描かれている。拝殿も松皮葺である。本図の構図は本社向かって左上空から俯瞰している。明治十六年（一八八三）十一月に差し出された境内平面図<sup>(42)</sup>によると、社地を三一五坪と主張している。本図と境内平面図で大きく異なる点は拝殿の両側の仮屋の描写である。この仮屋は長谷八幡宮の宮座である蔭山座と新座の座小屋であるが、両者の描写の違いは以下の二通りに解釈できよう。一つは仮屋の位置が本図では本社より奥に描かれている。つまり、本図においては踊りを主に描くために障礙となる仮屋を現実よりも後へデフォルメして描いた。もう一つは、境内平面図作成年と本図の景観年代は二百年程の違いがあると思われる、本図の景観年代当時には仮屋は建てられていなかった。

以下、「長谷踊夜宮図」を子細に検討する。墨書によると十二の灯籠



踊りが出るとあるが、本図には九人による輪踊りの灯籠踊りが描かれている。樹木の陰となつて残りの三つの灯籠が見えない。灯籠上の造り物として水車、御座船、牡丹、鳥居と神社、梅、桶に柳、花瓶などが判別できる。人間が被ることが果たして可能かと思われるほど台座の灯籠が肥大しているが、先述したように松崎の事例から考えると、誇張表現ではなさそうである。造り物に多様な趣向を求める風流灯籠であるが、その趣向は村人の発想のみではなからう。『日次記事』によると、京の町

では十七世紀中頃には、七月一日から「截子燈籠、台燈籠、金燈籠草（ほうずき）挑燈、小行燈」の盆灯籠の市売りがはじまったとされ、すでに灯籠づくりの業者が市中に存在していた。洛北においても、市中でプロが作ったそれらの灯籠を買い求め、その造形のアイデアや流行の情報を見聞きし、応用したものもあったであろう。踊り手は十六、七歳の女性で、白帷子、頬被り、赤色の前垂れの装いと記される。白帷子と頬被りは先述した「十二ヶ月風俗図」を彷彿とさせる。娘盛りの体力がないと

大灯籠は被けないという現実がある。灯籠を被いた踊り手が輪になり、その中間には、踊り手と同じ装束の女性が扇子を広げて腰を折り、拍子を取りつつ、踊り唄を歌っているものと思われる。松皮葺きの拝殿の周辺には、出番を待っているものか、すでに踊り終えたものか、灯籠踊りと同様の装束の十二、三人の女性が控えている。赤子に乳をやったり、子どもの手を引いたりしている女性や、老女も混じっている。この集団は灯籠踊りの交替要員の踊り手ではなからう。先述したように、灯籠踊りは十六、七歳の筋力や跳躍力を必要としたものであろうから、中年や年配の踊り手は灯籠踊り以外の手踊り等を演じたものと思われる。松皮葺の拝殿の縁に鎮留めの太鼓を据えて、それを男が打っている。その回りでは三人の男が鉦を打っている。左手で直接鉦を掴んでいるので、当り鉦、チャンチキ、コンチキ等と呼ばれる摺り鉦であると思われる。踊りの中央には、向かい合つて両手の桴で鞆鼓を打つ二人、太鼓を目の前

の人物に持たせて叩くもの、笛を吹く男の後姿（一人）、扇子を畳んだり、広げたり、団扇であおぎながら唄で音頭を取るらしきもの（七人）が描かれる。この七人は灯籠を被いた踊り手の中間で踊っている女性と同じ所作で囃しているものとみてよいであろう。

見物人に目を転ずると、稚児に酌をさせている折烏帽子の武家など、さまざまな身分の人々が入交じっている様子がわかる。『京都府愛宕郡岩倉村概誌』によると、岩倉村内には武士株と称する家々があつたが、このような人々を描いたものであろうか、あるいは町中よりの見物であろうか。本図景観年代時期の人口は分らないが、前述の『土産大神雑誌』によると、明治十年代の長谷・花園・中村の氏子は合わせて一三七戸とある。明治十年代の『京都府地誌』によれば、岩倉一三三戸、一千四十九人、長谷七十一戸、三八六八、中村六十八戸、三八六八、花園四十三戸、二三〇人である。すなわち、岩倉と他の三村の合計の人口が同じくらいである。

灯籠踊りが十二基の灯籠で構成されているのは、一年、十二ヶ月の象徴であろうが、造り物自体は十二ヶ月の季節の趣向に則っているように思えない。風流灯籠の趣向には、著名な故事や物語あるいは詩や歌に取材し、その一景や心を表現する主題もあるが、十二基から成る長谷の風流灯籠の造り物は、ある主題に統一されたものではなからう。『日次記事』には、祭り当日まで造り物の趣向が秘されていたことが載り、久多にも同様の伝承があつて風流の精神を伝えていたことから考えても、主題の統一はなかつたであろう。また、十二という数は、出来秋の穫り入れを迎える豊作祈願の心意とも解釈できよう。

十二基の灯籠踊りの地域的特性を考える背景として、五山送り火の原型である万灯や万灯籠と称する盆の火の行事をあげることができる<sup>(45)</sup>。これは山上で数多くの盆の送り火を焚いて、祖霊を供養し、送る行事であり、すでに十五世紀には成立していた。特に応仁の乱が終結した直後か





图5 長谷踊夜宮図 (国立歴史民俗博物館蔵)



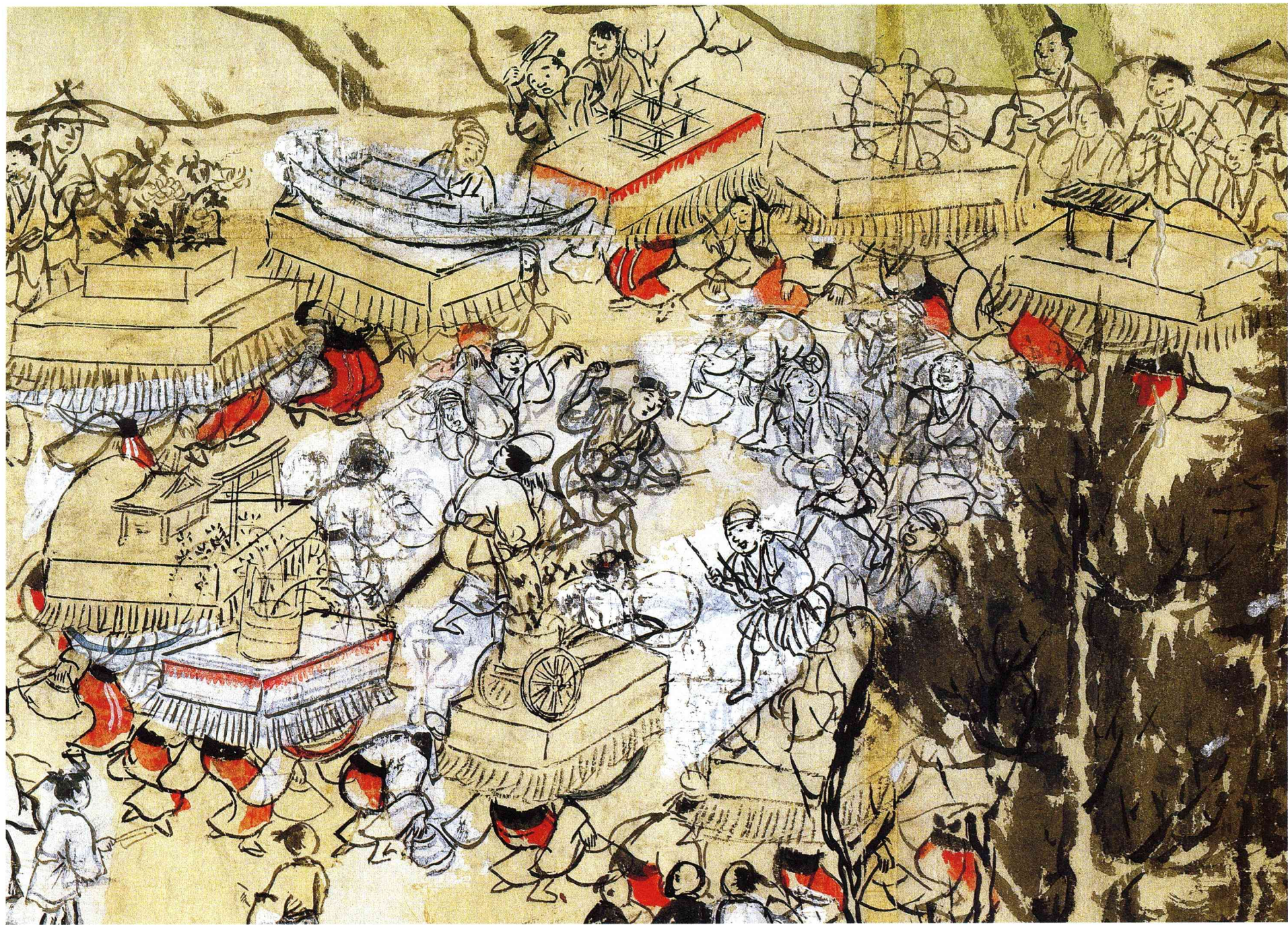


图6 同部分图



ら広く姿を現した。例えば、京都市北区大森（旧小野郷）の万灯は、八月十六日夜に大ゆり山（現・火勢山）で行ない、愛宕火・万灯・大文字の順に点すのがしきたりであった。万灯の際は、三・四・五個合計十二の松明を三段にセットし、村に向けてゆっくり回転させながら燃やす。大森の万灯は火の数により御十二灯とも呼ばれ、福井県や京都府に分布する同種の行事と比較すると共通点が多い。このように、万灯籠には十二（ないし十三）の火を意匠とする一つの定型があり、植木行宣は一年を象徴する十二灯型が万灯籠の基本であると推測している。<sup>(46)</sup> 万灯籠はさまざまな意匠を楽しむ多様な展開を示し、可動式から山の斜面（地面）へ固定する五山送り火へ展開したものもある。一方、可動性の十二灯型万灯籠の趣向は、京都の栗田神社、大豊神社（鹿ヶ谷）、下御霊神社の祭礼に出ていた「十二燈」や盆の灯籠踊りへも展開していった。長谷八幡宮の十二灯籠もこの系譜上に位置するものと思われる。

また、先述した黒川道祐の『日次記事』、『北肉魚山行記』、『遠碧軒記』によると、長谷八幡宮の灯籠踊り終了直後、花火が上がった、とある。

これは盆の送り火としての花火であり、同じく旧盆の送り時期に、北山に分布する松上げのようなものであろうか。<sup>(48)</sup>

## ⑦ おわりに

京の町から洛北一体に灯籠踊りが流行したのは、十七世紀に入ってからのことである、というのは定説になっている。<sup>(49)</sup> しかし、同じ洛北といっても、久多など安曇川花笠文化圏に対して、岩倉・長谷・花園は町中と地理的に近い。高野などには室町末期に掛け踊りがあった記録もある。長谷八幡宮の灯籠踊りの成立について、室町時代の記録がないため十七世紀に入ってから伝播である、と断じてしまうことは本稿では避けたいと思う。

## 註

- (1) 植木行宣「山・鉾・屋台の祭り―風流の開花」第四章「風流の世紀」（白水社、二〇〇一年）を参照
- (2) 今川文雄「訓読明月記」河出書房新社、一九七七年
- (3) 「盆踊」『邦楽百科辞典』音楽之友社、一九八四年
- (4) 女性が被る金灯籠は幻想的な幽玄美を醸し出し、観光に役かっているが、金灯籠自体はごく新しい趣向である。元々、山鹿の灯籠は全て紙細工で一本の骨も用いない。その大掛かりで精巧な細工には誰もが目を見張る。八月一日、町内ごとに、宮造り・座敷造り・灯籠人形・春日灯籠などが展示され、夕方に灯りが点される。菊池川河畔では花火が打ち上げられ、灯籠盆踊りが行なわれる。翌十六日の真夜中に「上り灯籠」になり、各町内の技巧を凝らした灯籠を若者たちが担ぎ、「ハイ灯籠」という掛け声で町を練り、最後に大宮神社にくり込む。『中陵漫録 五』という史料によると、江戸時代、山鹿の宿駅の人が毎年旧七月十六日の夜、分限次第で、各々、長さは二、三間、幅二間くらいの灯籠を出した。造り物は船、柴居、唐船など、皆巧みな細工である。これを社前より三丁目ばかりの間に引き出し、左右の路傍は見物人で一杯であった。熊本よりの見物も多く、この細工は国禁により、他国に行つて作爲することは禁じられていた、という。（本田安次「語り物・風流」木耳社、一九七〇年）
- (5) 註(3)を参照
- (6) 小寺融吉「郷土芸能と盆踊」桃蹊書房、一九四一年
- (7) 「日本の伝統芸能」錦正社、一九九〇年
- (8) 「念仏芸能と御霊信仰」名著出版、一九九二年
- (9) 「京都府の盆行事」文化庁文化財保護部編『民俗資料選集Ⅲ』国土地理協会、一九九八年
- (10) 「京都の盆行事」『京都市歴史資料館紀要』十号、一九九二年
- (11) 「京都の盆踊り」八木透編『京都の夏祭り』昭和堂、二〇〇二年
- (12) 森末義彰「盆踊の研究」『宗教研究』一〇一一、一九三三年、山路興造「風流踊」『芸能史研究会編『日本芸能史』四（中世・近世）、法政大学出版局、一九八五年と植木行宣註（一）、京都市史編纂室編『京都の歴史』四、平凡社、一九七九年を参照した。
- (13) 註(1)を参照
- (14) 桑島慎夫「風流燈籠の考察」『芸能史研究』四、一九六四年

- (15) 京都や奈良の風流踊りが西日本各地に伝播し、民俗芸能として伝承されている。雨乞いなどの目的で踊られた風流踊りの多くに、かつての輪踊りの「側踊り」を失っている事例が見られる。(以下は前掲山路興造「風流踊」(12)による) 太鼓踊り・鞆鼓踊り・花踊りなどと呼ばれる、美しい神籬(装飾)を背に負った風流踊りは、輪踊りの「中踊り」が残存し、固定化したものが多い。また、近世中期以降の盆踊り口説きの流行により、輪踊りの「側踊り」が独立して、樽太鼓と音頭を囲む盆踊りとなっていた。つまり、かつての風流踊りの「中踊り」が残ったものが民俗芸能の風流踊り系のもので、「側踊り」が独立したのが現在多数を占める輪踊り形式の盆踊りである。しかし、和田修が指摘する(11)ように、地方に分布する全ての風流系芸能が、いったん完成した風流踊りから、ある要素が独立して伝承されているわけではなく、ケース・バイ・ケースであるのが、現実である。
- (16) 「洛北の盆踊」京都府教育委員会編『京都府の民俗芸能』二〇〇〇年
- (17) 「歳旦風物図に就て」『美術研究』二五、一九三四年
- (18) 「風俗十二図帖と土佐久堅」『國華』八二、一九六〇年
- (19) 「十二月月風俗図」『三彩』一二六、一九六〇年
- (20) 「大和文華」三七、一九六二年
- (21) 「山口逢春記念館研究紀要」第二号、二〇〇一年
- (22) 同①年中行事、小学館、一九八三年
- (23) 前掲(12)「風流踊」
- (24) 田中緑紅「京都の盆踊」『郷土風景』二一八、一九三三年八月、「緑紅叢書三の一 京のお盆と盆踊り」京を語る会編、一九五九年、芸能史研究会編「久多の花笠調査報告書」、一九七四年
- (25) 「洛北の風流と花」『芸能史研究』四〇、一九七三年
- (26) 前掲「京のお盆と盆踊り」、八瀬村役場「赦免地踊り」『民俗芸術』三一、一、萩原秀三郎「赦免地踊り」『芸能』八一、一九六六年
- (27) 「山城・久多花笠踊」『室町芸能史論考』三弥井書店、一九八四年
- (28) 前掲「久多の花笠調査報告書」
- (29) 同右
- (30) 山城地方に目を転ずると、京都府綴喜郡宇治田原町湯屋谷の盆踊りが灯籠を用いる。一九八二年の京都府立山城郷土資料館「祈りとくらし」展で紹介された。京都府教育委員会の委嘱により、一九九七～一九九九年の三年間の調査が実施され、二〇〇〇年に刊行された『京都府の民俗芸能』において、横出洋二氏が報告を執筆している。湯屋谷の盆踊りは、毎年八月の地藏盆に金剛山地蔵院長福寺境内で夜踊られる。集落が四つの谷に分かれ、各谷ごとに制作した灯籠を寺の境内に献灯し、そこで盆踊りを踊る。灯籠は当屋の家に戸主が寄って作る。灯籠は四角の木枠に和紙を張り、中央に竹竿を通したもので、長細い形のもの、平たいものと二種類ある。ローソクは底板に突き刺した釘に立てる。木枠は毎年同じ物を使い、和紙だけ張り替える。平たい灯籠には特徴が二つあり、一つはナスビ・キュウリ・トウガン・トウガラシなど各種野菜で工夫して作ったその年の干支の動物を飾ること、もう一つは和紙の四面に豊作祈願や時世を風刺した内容の歌を記すことである。夕方、灯籠が出来上がると当屋の接待で会食し、しばらくして当屋他二、三人で灯籠を寺に運び、各谷が境内の一角に並べて立てる。八時ごろから寺の本堂で法要が始まる。本尊の前に安置された木造の地藏菩薩立像の前で住職が読経して供養する。地藏の前には、風車、スイカ、野菜を竹軸で組んだものをたくさん供える。法要の後、江州音頭による盆踊りが行われる。昔は青年団が主催し、境内に四角い櫓を組み、寄附を募って桜川某という音頭取りを呼んだ。この灯籠には時世を風刺した、当座性の風流が残っている。
- (31) 『京都古習誌』地人書館、一九四三年
- (32) 註(16)を参照
- (33) 同右
- (34) 同右
- (35) 葛西善三郎「盆踊り」『洛北岩倉研究』四、二〇〇〇年、初出「虹のあと」Ⅲ、一九九七年
- (36) 同右
- (37) 中村治「明治時代以前の長谷・中・花園村の祭」(岩倉北小創立二十周年記念事業委員会編『洛北岩倉誌』一九九五年)
- (38) 『日本庶民生活史料集成』第九巻、三一書房、一九六九年
- (39) 『続日本随筆大成』別巻「民間風俗年中行事上」吉川弘文館、一九八三年
- (40) 同宮の本社正面には、黒馬とそれを曳く二人の人物を描いた、慶長七年(一六〇二)「八月十日」と「奉掛御宝前」の銘を持つ扁額が掛けられている。放生会に奉納された扁額と推測される。
- (41) 前掲(31)『京都古習誌』によると、社殿は下鴨の河合社の旧殿をいたいできた、という伝承がある。
- (42) 長谷八幡宮社家「伊佐義武家文書」
- (43) 中村治前掲「明治時代以前の長谷・中・花園村の祭」、「長谷をたずねて」(『洛北岩倉研究』二、一九九八年)によると、江戸時代、次のような宮座構成であった。藤山座 十六軒 藤山神社・惠尊院(浄土宗)に属す  
新座 二十軒 長谷八幡宮・地藏院(浄土宗)に属す

両方の座には各五名の宮役があり、その最年長をそれぞれ一和尚（いちばんじょう）と呼んだ。新座には長谷の二十軒の他に、花園と中が属していたように、新座の一和尚は長谷、花園、中の順であつた。蔭山座と新座は戸数の上ではずいぶん差があつたが、役職は対等にあつた。蔭山座の首席が一和尚となり、新座の首席が二和尚を勤めるといふようになっていた。

(44) 註(1) 参照。

(45) 同右

(46) 同右

(47) 田中緑紅『ふるさとの祭りと行事』京を語る会、一九六九年

(48) 柱松とも呼ばれる松上げは、村の広場に長さ二十メートル近いトロギ（灯籠木）を立て、先端に傘状の籠を取り付け、村の男たちが「上げ松」と呼ばれる松明を投げ上げて、火をつけるというものである。（『あるくみるきく』一六八、北山の松上げ行事、一九八一年二月）。また、長谷における灯籠踊り構成村の一つである岩倉の石座神社では、季節は違ふが松明の神事が行われている。

『京都府愛宕郡岩倉村概誌』に以下のようにある。毎年十月二十二日夜に行なわれる。毎年、中在地と忠在地の二つの小字ごとに輪番があり、当番が石座神社前にて雌雄の大蛇の形をした松明を作る。その藁の結び方は、平年の場合は十二カ所を結ぶ。閏年は十三カ所である。その丈約七間、廻り約十五尺、古くは十三間であつた。大雲寺の法師と神社の神人による式の後、神人は神前の灯火を下し、松明の左より右へ火を点じて晝に至る。長谷に関しては前掲「土産大神雑誌」によると、明治十六年八月のこととして、雨乞いのために長谷と中村が字小松原山上へ松明を上げる記事があつた。

(49) 前掲『京都の歴史』四など。

(付記)

長谷の現地調査は二〇〇二年二月十六日に行なつた。長谷八幡宮社家伊佐家文書の調査は京都市歴史資料館の紙焼きを利用させていただいた。同資料館に感謝申し上げます。また、先行研究として植木行宣先生と山路興造先生の業績に負うところが非常に大きかつた。末筆ながら心よりお礼申し上げます。なお、本研究は文部科学省研究補助金、基盤研究C「山車等の祭礼シンボル―祭礼風流―」の造形に関する民俗学的調査研究」（課題番号二三六二〇三七二）によるものである。

（日本女子大学人間社会学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇三年三月一五日受理、二〇〇三年六月二六日審査終了）

## ***Bon* Lantern Dance in Northern Kyoto**

FUKUHARA Toshio

The Picture of the Nagatani Hachimangu Decorated Lantern (風流灯籠) Dance, one page of a document held in the collection of the National Museum of Japanese History, is an illustration of the decorated lantern dance of Northern Kyoto. This bon lantern dance was performed in the Nagatani Hachimangu shrine situated in the east of the Iwakura basin in Sakyo-ku, Kyoto. Although this tradition has disappeared today, participants included not only people living in the settlement of Nagatani, but villagers living in Iwakura, Hanazono and Nakamura as well. Various different motifs were made for the lanterns, including water mills, boats used by the imperial family and the elite, peonies, torii gates and shrines, plums, camellias, willows in tubs, and vases. The lanterns have a thick base so as to make it impossible for people to put on them. As for performing arts staged in Kyoto during Bon today, there is the Rokusai in southwest Kyoto, and the Amitabha Buddha Nembutsu dance and the Nichiren Sect Daimoku dance in northeastern Kyoto. Themes from the elaborate dances of the Early Modern Period that were popular in urban Kyoto up to the 16th century remain alive in the Rokusai stick dance (Chudo-ji temple and Mibu) and the Yasurai-hana of Imamiya. Traces of the lantern dance are to be found in only the north of Kyoto in rural villages located along the Wakasa highway along the Takano River. Today, there are but two dances that carry on the lantern dance legacy. These are the Hanagasa dance of Kuta in Sakyo-ku, and the Shamenchi dance in Yase, also in Sakyo-ku. Viewed from the standpoint of documents and illustrated materials from the Early Modern Period, a Bon decorated lantern dance filled with the Muromachi spirit was also performed at Nagatani Hachimangu.